

図書ニュース

私が書き留めた本の言葉たち

「伝えたいことをまとめてから言葉にしましょう」

これが小学生の頃に頂いた評価。それに対し、父に何かを言われた記憶はない。

父は私をよく本屋に連れて行った。「本ならいくらでも買ってやる」そう言われて、『果てしない物語』や『モモ』など、装丁のきれいな本ばかりを選んで買ってもらった。それらの本を読み終えると、本棚に一冊、一冊並べた。なんだか心が弾んだ。

ある日、父が「図書館に行こう」と言い出した。図



書館の本では、読んでも自分の本棚に並べることはできない。なんの為に本を読むのか、分からない気がした。

父に連れられ、なんとなく通っていた図書館は、いつの間にか大切な場所になっていた。いつも手元にある本とは違う、図書館の本たち。少しでも身近に置いておきたい、気になった言葉たちをノートに書き留めるようになった。

以下は今年度読んだ本の中から、私が書き留めた本文の引用です。



『うつくしが丘の不幸の家』 町田そのこ (913/MA)

「たったそれだけ。そういうことって意外と多いのよねえ。一生乗り越えられないだろうと思ってた問題だって、あるとき急にぱっと拓けたように解決することだってある。それって見る角度とか自分の心持ちとか、こんなことで？って笑えちゃうような些細な理由だったりするの。この年になっても、いちいち驚いちゃうのよねえ。」

それにねえ、あなたしあわせがどうこう言うけれど、しあわせなんて人から貰ったり人から汚されたりするものじゃないわよ。自分で作りあげたものを壊すのも汚すのも、いつだって自分にしかできないの。他人に左右されて駄目にしちゃうなんて、もったいないわ。」



『八月の銀の雪』伊与原新 (913/I)



「クジラやイルカの脳は人間の脳よりも大きいのですが、これは単に彼らの体が大きいからです。脳のサイズで知能を予測したいのであれば、脳の重さと体重の比を使わなければならない。そうした指標の一つ、脳化指数というのを見てやると、ヒトはおよそ7という値なのに対し、イルカは1.6から4.6つまり、相対的な脳のサイズは、人間のほうがかなり大きいんです。

ところが最近では、脳の力を測るなら、脳化指数なんかより、ニューロンの数を使えという考えがありましてね。ニューロンというのは、情報処理に特化した脳内の細胞です。研究者たちは、より高度な機能をつかさどる大脳皮質のニューロン数を、いろんな動物で調べていった。ヒトは160億個超。予想通り、哺乳類で断トツ最多と思いきや、なんとそうではなかった。ヒレナガゴンドウというハクジラのほうが、倍以上多かったんです。さあ、皆さんはこの事実を、どう考えますか？」

『炉辺の風おと』梨木香歩 (914/N31)

「ナナカマドの赤い実は、鳥たちの大好物だ。なぜ、鳥は毒のある実をたべても大丈夫なのか。じつは生では毒性のある実も、冬になり凍結と解凍を繰り返すうちに解毒されてしまうものらしい。だから、雪の降る頃を見計らい、鳥たちは熟したナナカマドに群がるのだ。若い頃は付き合うのが苦手だった「毒のある」ひと、苦悩や悲嘆を繰り返し味わううち、いつか毒の部分が抜け、味のあるひととして付き合えるようになる、ということだろうか。それはどっちが、ということはなく、きっとお互い様で、お互いの経年による変化が、相性の変化を引き起こす、ということだろう、この場合。何にしても、思い込みはいけない。」



「群れのなかに、一羽や二羽、嗜好の変わったものが出てくるのは自然なことなのだろう。環境の変化などで種の大半が減んでも、そのなかに別の条件でも生きていける一群があれば絶滅は防げるわけで、一族のなかに変わり者が出てくるのは理にかなったことらしいのである。そういう理屈でいけば、アウェイで生きづらさを抱えながら生きていかなければならぬ「変わりもの」は種族の存続レベルの使命を担っているわけだから、皆から大切にされてしかるべきで、決して疎外されたり邪険にされたりしていい存在ではない。」



『木のストロー』西口彩乃 (583/NI)

「「西口はタイ」なんだ」と、社長は全社員の前で言った。え、私ってタイなのかな…？ちょっと戸惑う。話をうかがうと、魚の鯛と、「やりたい」の「たい」を掛け、つまりやらされるのではなく、「やりたい」と思ってやるのが大切だということだった。」

『文豪の死に様』門賀美央子 (910/MO)

「レモンエロウの絵の具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色って、そりゃ相手は檸檬ですもの。語源になった果物に向かって「あんたは単純なレモン色をしていますな」って、言われた檸檬も困るってものだ。どうにも、基次郎には主客が転倒する癖があるらしい。」



「個人が集団の悪意から我が身を守る最大の武器は、健やかな自己愛と自尊心、そして愛というエネルギーを常に補充してくれる理解者だ。だが、理解者は、自らが率先して愛と肯定を与えることによつてのみ得られる。」

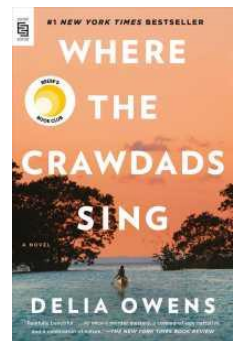
自分はどこまでも肯定されるべき人間である。その確信に根拠は必要ないことを、かの子は教えてくれる。」

『ザリガニの鳴くところ』ディーリア・オーエンス 友廣純 (933/O)

「Some behaviors that seem harsh to us now ensured the survival of early man in whatever swamp he was in at the time. Without them, we wouldn't be here. We still store those instincts in our genes, and they express themselves when certain circumstances prevail. Some parts of us will always be what we were, what we had to be to survive——way back yonder.」



「いまでは残酷に感じられる行動も、初期の人類が生き延びるうえでは重要だった。その人類がどんな沼地に住んでいようとね。もしその行動を避けていれば、私たちはいまこの場にいなかったでしょう。その本能はいまだに私たちの遺伝子に組み込まれていて、状況次第では表に出てくるはずよ。私たちにもかつての人類と同じ顔があって、いつでもその顔になれる。はるかむかし、生き残るために必要だった行動をいまでもとれるのよ。」



『マチネの終わりに』 平野啓一郎 (913/H45)

「展開を通じて、そうか、あの主題にはこんなポテンシャルがあったのかと気がつく。そうすると、もうそのテーマは、最初と同じようには聞こえない。花の姿を知らないまま眺めた蕾は、知ってからは振り返った記憶の中で、もう同じ蕾じゃない。音楽は未来に向かって一直線に前進するだけじゃなくて、絶えずこんな風に、過去に向かっても広がっていく。そういうことが理解できなければ、フーガなんて形式の面白さは、さっぱりわからないですから。」



「人は、変えられるのは未来だけだと思い込んでる。だけど、実際は、未来は常に過去を変えてるんです。変えられるとも言えるし、変わってしまうとも言える。過去は、それくらい繊細で、感じやすいものじゃないですか？」

『本が紡いだ五つの奇跡』 森沢明夫 (913/M103)



「若い頃ってのは、迷いに迷うのが正解なんだよ。で、ああでもなかった、こうでもなかった、次はこうしてみようって、なるべくたくさん失敗と修正を繰り返すんだ。そうやってきた奴だけが、いずれ経験豊富な頼り甲斐のある大人になれるんだからな。」

『水曜日の手紙』 森沢明夫 (913/M103)

- 自分の心に嘘をつかない。
- よかれと思うことはどんどんやる
- 他人を喜ばせて自分も喜ぶ



「世界で一番重たい物とは、釣行の後の空っぽのクーラーボックスである。」

『明日の子供たち』 有川浩 (913/H45)

「人生は一人に一つずつだけ、本を読んだら自分以外の人の人生が疑似体験できるでしょう。物語の本でも、ドキュメンタリーでも。そうやって他人の人生を読んで、経験することが、自分の人生の訓練になってることがあるんじゃないかって、先生は思うのよ。踏み外しそうなときに、本で読んだ言葉が助けてくれたりとか…」



私にとって、読書とは、宝探しのようなもの。その時の環境や心の持ちようで、心に響く言葉は違う。いま、あなたに届く言葉は、どんな言葉ですか？